

ささやまっこだより

2月

平成 30 年 2 月 1 日
篠山保育園
園長 足立善一郎



寒さが厳しくなってきました。保護者のみなさんも仕事に育児と自分の体調を顧みず、精を出しておられることでしょう。無理されると体調を崩すことになり、とはいつてもなかなか休める時間がないというのが現実でしょう。とにかく、予防といつもと違う体調に気づかれたら受診されるか、薬を飲んでのりきりかかないですね。私たち保育者は、ありがたいことに毎日子どもたちのパワーを間近に見ますので、そこから元気ももらっているような感じです。体調不良で心が折れそうになった時、子どもたちが「せんせいだいじょうぶ？」と声をかけてくれると、気持ちの踏ん張りがききます。“私たちも子どもたちに支えられているんだな”と実感します。私たち大人は、未来ある子どもたちのために



無償の愛を注がなければならないと思います。それにはまず、私たち大人の体と心の健康が大切です。保護者の皆さんと私たち職員と共に子どもたちのために、頑張っていきましょう。

成人式 祝い太鼓で出演！（ばら組）



1月7日に行われました、篠山校区成人式にばら組のぎんがグループさん15名が出演しました。篠山校区の成人式は、保育園、子ども会、小学校のお謡いクラブの生徒さん等地域のみならずお祝いをしていこうということで、子どもたちの出番がたくさん準備してあります。成人者は篠山校区出身者が多いため、保育園の先輩たちも多く、にこにこしながらばら組さんの雄姿に拍手を送ってくれていました。ばら組さんも、“ぶつつけ本番”の舞台だったため緊張していたようでしたが、見事に曲太鼓「SHUTUJIN」をたたきあげました。



ばら組さん 剣道納会の日が決定！

剣道教室の最後の日、試合が開催されます。トーナメント方式で試合に勝ちぬいた子が、金メダルを手に入れることができます。普段見られない「本気モード」になる子どもたちの試合ぶりが楽しみです。日時：3月10日(土)午前9時40分開始

場所は：篠山コミュニティセンター大ホール

まずは、お知らせまで！

2月の行事予定表

- 2日(金)節分豆まき
- 5日(月)剣道教室(ばら組)
- 8日(木)お弁当の日、リハーサル(もも、ふじ、ばら組)
- 16日(金)生活発表会準備
- 17日(土)生活発表会、園内研究会
- 20日(火)避難訓練
- 23日(金)誕生会
- 28日(水)老人ホーム紅葉樹訪問(ばら組)

ご都合のつかれる方は、いつもより早めのお迎えにご協力頂ければ助かります。保育は通常通りです。

8日のもも、ふじ、ばら組さんのリハーサルは9時までの登園をお願いします。

給食献立表の修正
17日(土)は、発表会の為給食・おやつはありません。

28日の第2回老人ホーム「紅葉樹」への訪問では、日本太鼓を披露し、昼食も一緒にいただくことになっています。紅葉樹の給食も、とてもおいしいですよ！(午後1時ごろ園に戻ります)
(※インフルエンザ等流行病の子が多い場合、お年寄りの方への感染予防のために中止になる場合があります)

心を豊かにする こどものことば



子どものことばには、何とも言えない力が溢れています。12月の園だよりに続き、子どもたちのユーモラスなことばをご紹介します。

○保育園で『ももたろう』の話聞いた4才女の子Aちゃん。

A:「ねえ、おかあさん。ももたろうのきび団子ってどんな音かするの」

母:「きび団子は、お団子なんだから何もおとなんかしませんよ」

A:「だって、先生が 何度もひとつください おともします、って言ったんだもん」。

○親子の会話で 4才おとこの子

「ママ えいようあるものって、まずいんだよね」

【こどものことば】～心の育ちをみつめる～ 今井和子著

かわいがり子育て質問箱



「子育てでいちばん大切なこと」より

ある3才児のお母さんからの質問です。

『うちの子はとても臆病です。公園でも私にしがみついて子どもたちの中に入っていきたくしません。ようやく砂場で遊び始めても、私が砂場の外に出るとたちまち追いかけてきます。とても怖がりです私のそばを、離れません。何がそんなに不安なのでしょう？』

◇子どもが望むだけそばに付いてあげてください。やがて、お母さんが付いていなくても遊べるようになります。なぜなら、お母さんから離れられない子どもは、まだ自分の周囲に十分な「安全空間」を作ることができていないからです。子どもにとってお母さんは特別な存在です。2歳ぐらまでは、お母さんと自分は別々な存在なのだという感覚すらないくらい一心同体です。それが成長とともに、自然にだんだん母子分離がされていきます。この母子分離を可能にするのが、「安全感」と「安心空間」という感覚です。

子どもはお母さんの愛情に安心すると安全感を心の中に抱けるようになります。それから安全空間を作ります。その安全空間を持ち歩くようにしてお母さんから離れていきます。

どこにいても、お母さんが見えなくても、自分はちゃんと守られているぞ、という気持ちでいられるということなんです。この安心感や安全空間といのは、イギリスの小児科医が子どもの発達を観察していて、使い始めた言葉だそうです。親が見ていないところでも、平気で行動している子どもたちは、安全空間にすっぽり包まれているわけです。親と離れることを怖がる時は、「早く離れて！」なんて思わずに、この空間がしっかりできあがるまで、いっしょにいてあげてください。

児童精神科医 佐々木正美著

